

# 「ら行」部の変遷から見る組み合わせ本倭訓栞の価値について

## A study on "combination edition" of WAKUN NO SHIORI

平 井 吾 門\*

Amon HIRAI\*

### 要旨

東京都立図書館蔵本や東大附属図書館蔵本に見られる「組み合わせ本」の『倭訓栞』について、語彙の増補状況が特殊な「ら行」部の項目を調査することで、従来言及されることのなかった諸本との前後関係の新たな可能性を考察し、組み合わせ本を積極的に調査・研究の対象としていくことの価値について論じた。

キーワード：谷川土清、国語辞書、自筆本

### 0 はじめに

マスメディアを通じて国語辞書が取り上げられる際、その語釈や収録語彙数に焦点が当てられることは多いが、そもそも国語辞書とはどのようなものであるのかということは、読者や視聴者の共通知識として大前提にされている現状がある。また、学校教育においても、国語辞書の利用を伴う指導法は確固たる地位を築いている一方で、国語辞書の概念説明は教師の裁量に任せられ、おざなりにされてきた感がある。

筆者は、現代日本において「国語辞書」と言われた際に多くの人が想起する「国語辞書像」の本源が、江戸中期に行われた『倭訓栞』の編纂過程において形成されたものと考えている。その為、倭訓栞編纂過程の解明は、単に国語学史上の問題ではなく、「近代以降我が国において国語辞書と認識されてきた概念とは一体何物であるのか」を解き明かす一方、近世来の編纂・出版過程において置き去りにされた要素に再度息を吹き込むことで、新たな「国語辞書」概念の形成の可能性を探るものとなるのである。

倭訓栞編纂過程の研究では、諸本比較が基本となるものの、概して言えば資料の少なさから倭訓栞研究はその進展が遅れてきた。現在知られている倭訓栞の諸本には次のようなものがある。なお、括弧内で示した略称や、本稿で中心的に扱う「組み合わせ本」の呼称は、三澤薫生氏の一連の御論考によるものである。

- ①谷川土清自筆本（自筆本。石水博物館所蔵。初期稿本）
- ②谷川清逸転写本（清逸本。石水博物館所蔵。完成直前の姿を表す非節略本）
- ③整版本前・中・後編（版種数種あり）
- ④活字本二種（増補語林版、成美堂蔵版）
- ⑤所在不明の自筆稿本（尾崎1984紹介）
- ⑥組み合わせ本（都立中央図書館本系）

倭訓栞については、編者・谷川土清（1709-1776）が自筆稿本の類を「反古塚」に埋納したことが記録として残されており、整版本刊行以前の諸本が特に重要である。本稿は、存在やその重要性は指摘されつつも詳細な調査が行われてこなかった⑥組み合わせ本について、谷川土清の意向に基づく倭訓栞編纂過程の解明のための資料としてどのように扱えるものかを調査したものである。

### 1 先行研究及び研究方法

整版本前編は「あ～そ」部、「た～ほ」部、「ま～お」部の順に分割出版されているが、組み合わせ本は「ほ」部までを刊本で揃え、「ま」部以降を写本の形で揃えて一セットとしたものである。この写本部分に初めて言及したのは尾崎（1984）であり、都立中央図書館蔵本と別本の存在を紹介した上で、「これらの稿本の研究は今までになされていないので、今後の課題と

\*弘前大学教育学部国語教育講座

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

なる」と述べている。

これを受けて三澤薫生氏は、清逸本の有用性について論じた三澤(2008)の中で、組み合わせ本の存在と意義について次のように述べる。

なお、『和訓栞』に斯かる稿本がこれまで報告されなかったわけではない。東京都立中央図書館に蔵せられる一本はこれ(清逸本=筆者注)に類するものであり、稿者もそうした一本を蔵している。ただ、両書いずれもが後半の「ま」行以降を見るに過ぎず、清逸本のような全巻揃いの稿本となると他にあるを聞かないのである。

また、三澤氏は「もう一つの『和訓栞』稿本」(2007)の中で、『雅言集覧』の編者が「組み合わせ本」と同系統の写本を参照していたことを明らかにした上で、「組み合わせ本」の諸本について次のように指摘する。

ところで、右組み合わせ本の稿本として稿者は現在、四本を確認している。東京都立中央図書館本と東京大学図書館本、それに拙蔵の二本である。いずれにしても大同にして小異、明らかに同一の祖本に基づく転写本であることが判る。

さらに、清逸本と組み合わせ本とを比較することで、「都図書館本系が清逸本より以前に位置することは容易に判断される」としている。

三澤氏の研究から、整版本刊行以前の資料が少ない倭訓栞にとって、組み合わせ本は編纂過程を示す貴重な情報源の一つとなり得ることが了解される。その一方で、整版本や清逸本で「おひすがふ」として立項される項目が組み合わせ本諸本において「おいぞかふ」や「おいそがふ」などと表れることも指摘されており、細かな表記の差異を比較することには適し難い資料であるとも言える。このようにテキストの信頼性という点で自筆本や清逸本に大きく劣る部分があることから、筆者を含めて従来は、その性格を詳細に調査するよりも自筆本や清逸本の調査が優先されてきた。<sup>\*1</sup>

本稿では、組み合わせ本の性格を諸本の中で具体的に位置付けるため、見出し項目の細かな表記の差異は無視し、諸本における語彙の出入りだけを問題にする。特に、倭訓栞の「ら行」部における諸本(自筆本→組み合わせ本→清逸本→整版本)の変遷を通じて、組み合わせ本の持つ価値について考察を加える。その

過程で、倭訓栞「ら行」部の特殊性についても改めて指摘したい。なお、本稿の調査では東大附属図書館蔵本(D20-213)を以て組み合わせ本の底本とするが、東京都立中央図書館蔵本(特別買上文庫217)によって校合している。もし、更なる他本との比較で大きな修正点があれば後日補訂したい。<sup>\*2</sup>

## 2 倭訓栞の「ら行」部について

倭訓栞は谷川士清の生前には刊行されず、士清の没した翌年から110年かけて子孫たちの手により段階的に出版されている。

整版本は、前中後編の三編に分かれ、それぞれ「あ～わ」行までの各部を備えたものとして独立している。これは書肆によって分割出版及び内容の節略が要請されたためであり、清逸本以前の諸本にはそのような分割・節略が施される以前の様子が残る。

清逸本は刊行直前の姿を示すとされる完本であるが、士清没後も子孫を中心に編纂は続けられており、少なくとも整版本前編の初回刊行分以降は後人の手が加わっていることが知られる。逆に、初回に刊行された整版本前編「そ部」までは、士清の意図がほぼ反映された書物と見られる。なお、倭訓栞が前編中編後編に分割して刊行されていることは周知の事実であるが、その分割に際する個々の項目の振り分け基準や、各々の編における収録語彙の性格の差などに関しては殆ど研究が進んでいない。

以上を踏まえ、まず倭訓栞における「ら行」部について概略しておく。刊行された前中後各編の「ら行」部は後人の手により出版されているが、後述の通り「ら行」部には士清の意図を超えた項目は殆ど含まれていないようである。

そもそも倭訓栞は、和語を中心に収録された辞書ではあるが、整版本前編冒頭の「凡例」で自ら示す如く漢語や外来語も多く含んでいる。中でも、特に和語の期待できない「ら行」部については収録語彙が特徴的である。筆者は、平井(2016予定)において、収録語彙の語種分析を通じて自筆本「ら行」部の特殊性について調査し、次のような特徴を示した。

- ・外来語がラ行に集中している。
- ・他の部よりも助動詞の類を積極的に採録する。
- ・和語の期待できない分を最小限の漢語で補い、それも難しい箇所外来語を利用する。

自筆本を倭訓栞編纂過程の出発点として考えても、「ら行」に収められた語彙の変遷には土清の腐心の様子がよく伝わるのである。

さて、組み合わせ本「ら行」部の特徴を示すと次のようになる。まず見出し項目は110語句であり、諸本と比較すると次のようになる。

#### 【「ら行」部見出し項目数】

自筆本		42
組み合わせ本		110
清逸本		407
整版本	前編	307
	中編	89
	後編	42

自筆本が清逸本よりも前の編纂であることは自明だが、三澤氏が述べる通り、組み合わせ本が清逸本よりも前の段階を示す書物であることは項目数からも伺える。清逸本に比べて整版本全編の合計では31項目増加しているが、「らこ」や「らみ」、「らり」といった日本語として意味を持たない空見出しが半数以上を占める。この空見出しは五十音に不慣れな近世の読者に対する道標としてのものであり、組み合わせ本には原則として設定されていない。空見出しは刊行を見据えた際に完備されたことが確認でき、転写本としてテキストの信頼性に危うさの残る清逸本を補強する良い材料と言える。

さて、実質的に清逸本から整版本への編纂過程で増加していると考えられる項目は、

#### 【前編】

らかん  
りょうび  
れんしや  
ろくろかる

#### 【中編】

りうきん  
りふよう  
りんじきふ  
りやうぶ  
るりてふさう  
れんげ  
ろうざらるゝ

#### 【後編】

りかん

れつけん

の13項目になる。なお、「れつけん」については清逸本に小書きで増補されていることから、清逸本のもとなった稿本において増補が図られたことがうかがえる。また、「りやうぶ」については自筆本に「れふぶ」として記されている。

一方、組み合わせ本と清逸本の収録語彙の関係を調べると、前者は全て後者に含まれていることが分かる。すなわち、清逸本以降に増補されたと見られる前出の13項目についても組み合わせ本には一切現れないため、語彙の増補関係から考えてみても、組み合わせ本と清逸本の前後関係はゆるぎないものと言えよう。

### 3 組み合わせ本「ら行」部の特殊性

前節の通り、組み合わせ本が自筆本と清逸本の空白期間を繋ぐ資料であることは明白であると断言できそうな材料が揃っているのであるが、「ら行」部においてはなお不審な点が残る。

三澤氏は、三澤(2007)の中で組み合わせ本の「ま〜お」部について具体的な項目を掲出し、組み合わせ本において「中・後編所属の項目」が「認められる」ということを示している。その上で、

『栞』稿本が中・後編を収載している事実、裏を返せば『和訓栞』が当初から前・中・後の三編に分かれていなかったことが証せられたことになる。

と言及している。

同様の視点で、組み合わせ本所収の語彙がそれぞれ整版本のどの編に収められているのかを確認すると、次のようになる。(前は前編所収、後は後編所収、×は整版本に収録されていないことをそれぞれ示す。)

【項目】	所収整版本】
ら	前
らいし	前
らいち	後
らいのとり	前
らう	前
らうたし	前
らうかはし	前
らえ	前
らく	前
らくやき	後

らくさく	後	りやうし	前
らし	前	りよぐわひ	前
らしや	後	る	前
らす	前	るうつう	前
らせいた	後	るき	前
らち	前	るす	前
らつし	前	るつぼ	前
らつこ	前	るづう	前
らでん	前	るふ	前
らに	前	るらふ	前
らのへうし	前	るり	前
らはい	前	れ	前
らひ	前	れいぜい	前
らべいか	前	れいほう	前
らほつ	前	れうり	前
らん	前	れうし	前
らんこ	前	れうけん	前
らんはこ	前	れき々々	後
らんびき	後	れだま	後
らんじやたい	前	れつきすてみん	後
らめ	前	れてく	前
らる	前	れふし	前
られす	前	れん	前
り	前	れんり	前
りうきう	前	れんが	前
りうじや	前	れんじ	前
りぐう	前	れんぎ	前
りくぎ	前	れんし	前
りこん	前後	れんくわ	前
りしやう	後	れんせんあしげ	前
りじゆん	前	れり	前
りそく	前	れる	前
りちぎ	前	れろ々々	前
りちのしらべ	前	ろ	前
りつば	後	ろいろ	前
りつばふ	前	ろうは	後
りつしんべん	後	ろうし	前
りぶん	×	ろうさう	前
りふじん	後	ろく	前
りん	前	ろくぶ	前
りんのて	前	ろくだい	前
りんしばい	後	ろくさい	後
りやう	後	ろくはら	前
りやうけ	前	ろくとう	前
りやうげ	前	ろくしやく	後

ろくじやう	×
ろたい	前
ろぢ	前
ろとこ	前
ろなう	前
ろばん	後
ろひらき	前
ろふ	前
ろんぎ	前
ろれつ	後

ここから分かる通り、組み合わせ本全110項目の内、整版本では前編のみに所収される見出し項目が87、後編のみに記載される見出し項目が20、両本所収のものが2、整版本に記載のないものが2、ということになる。すなわち、組み合わせ本「ら行」部においては、中編所収の見出し項目が一切出てこないことが分かるのである。

次に、組み合わせ本と自筆本との関係を考える。平井（2016予定）で確認したように、「ら行」から始まる和語は原則として存在しないため、倭訓栞では起稿段階からその語彙収集に大きな苦勞を伴っている。そのような中で、まず自筆本と清逸本とを比較すると、自筆本全42項目の内、41項目が清逸本に収められていることが分かる。残りの1項目は「れふぶ」という語であるが、これについては例外的であるので補足しておきたい。

自筆本における「れふぶ」の項目は次のようである。（【 】は増補）

れふぶ 物に令法と書り木の名也所によりてやうぼといへり【山中にて】わか葉を食もの也

自筆本において見出しが見せ消ちによって「れうぶ」と訂正されているのであるが、「れふぶ」も「れうぶ」も清逸本には見られない。

ただし、清逸本の「はたつもり」という項目に、

はたつもり 令法をいふ木の名也といへりはたつまりともいふ遠州にぎやうぶ播磨にれうぼといふ民間葉を蒸て食の助けとす新撰六帖に

里人やわかな摘らんはたつもり外山も今は春めきにけり

と記されており、「令法」に関する記載がやや形を変えて収められている（自筆本に「はたつもり」の項目は見えない）。ところが、自筆本に準拠した内容もまた、整版本中編において次の如く「復活」している。

りやうぶ 物に令法と見え下学集に柃梧とかけり木の名也こわつともいふ所によりやうぼともいふ常州あたりにてはだかぼうともいふとそ山中の人は弱葉を食へり山茶料也といへり

これらのことは、おそらく異なる典拠に基づく編纂過程上の問題であろう。項目名も「りやうぶ」と自筆本からは形を変えていること、そして整版本中編は後人の手が入っていることを考えると、ここではどのように考えることが出来る。

①まず、初期稿本である自筆本で語彙を収集した際に何らかの典拠に基づいて「れふぶ」を採用したが、編纂を進めていく中で別の典拠（『物類称呼』など）に「はたつもり」を見出し、「れうぼ」についての言及や語釈の多角性などを勘案して、「れふぶ」を取り下げて吸収合併の形で「はたつもり」を立項した。

②その後、後人の手によって中編の編纂が進められる中で、語彙の手薄な「ら行」部において「りやうぶ」という語を何らかの典拠から見出し、採録するに至った。その典拠は土清の参照したものと同類のものであったが「れふぶ」「りやうぶ」の異同がある別本であった。

この点については、現時点で矛盾はないと考えるが、典拠の確定などを進めて尚よく検討したい。

「れふぶ」を例外的に処理した上で、改めて自筆本と清逸本との関係を考えてみると、基本的に自筆本「ら行」部の項目は清逸本に吸収されていると考えてよいことになる。語彙（特に和語）の大幅な増加は見込めない「ら行」部において、編纂過程の中で語彙を厳選するとしても、相当数減少させることは考え難い。然るに、清逸本ではまさしく自筆本を吸収する形で拡大を果たしているわけである。

それを踏まえて、自筆本と組み合わせ本との関係を確認しておく。結論から言えば、自筆本所収の「ら行」語彙に関して、決して少なくない数が組み合わせ本では収録されていないのである。

自筆本にあって組み合わせ本にない項目は以下の13

項目である。

らちもなし  
らま  
りふご  
りうこう  
りちい  
りつしん  
りんだう  
るいたい  
るうだ  
るすん  
れいもつ  
れふぶ  
れんじやう

「れふぶ」もその内容を勘案すれば、これらの全てが清逸本に継承されていることになる。そのため、「自筆本→組み合わせ本→清逸本」という編纂過程において、これらが単純な一直線上にはないことが分かる。

先に見たように、組み合わせ本「ら行」部においては、中編所収の見出し項目は一切出てこない。そこで、この13項目の中で中編に所収されるものを抜き出してみると次のようになる。

らちもなし  
りうごう  
りちい  
りつしん  
りんだう  
るすん  
れふぶ（中編では「りやうぶ」）

実に半数が中編所収であり、現時点では語種や語義の面でこれらに共通するものを見出せていないが、明確な意図の下に語彙の選別が行われていることは疑いようがない。

#### 4 まとめ

これまでの研究では、組み合わせ本は自筆本から清逸本へと続く橋渡しの場所に位置するものと捉えられてきたが、「ら行」部における組み合わせ本と諸本との語彙の出入りを考えると、どうもそのような単純

な話ではないことが見えてくる。自筆本の段階で中編語彙後編語彙とも出現していることから、中編の語彙だけが前編後編の語彙の後に増補されたわけではない。しかし、組み合わせ本において、清逸本成立の後に振り分けられたと考えられている中編の語彙が徹底的に排除されていることから、前後編の語彙と中編の語彙とが区別されていたこともまた明白になったのである。

「ら行」部だけをみて素直に考えられる可能性は次の二つである。

- ①組み合わせ本は清逸本以降に作られた原稿の抄出本である。
- ②清逸本以前に成立した組み合わせ本の本文は、後に土清が三編に分割する際に導入したものとほぼ同様の基準を以て選り抜かれた抄出本である。

後者の場合、抄出の際に見せた何らかの基準が後々中編所収語彙の選定に関わったと考えるのが自然である。土清が清逸本の後に作り上げた最終原稿を前中後の三編に分かつ作業を行った際、何らかの基準に基づいて語彙の振り分けが行われた。従来の研究でも、前編に古語や雅語、中編に俗語、後編に外来語や固有名詞がそれぞれ多く見られると繰り返し指摘されてきたし、倭訓栞前編の「凡例」にも「言語浩繁なれば簡帙もまた重大なるをもて分て三編とす今前編を刊行す此編もはら古言雅語を解釋するものなり」と一定の基準は示されてあるものの、個々の見出し項目がどのような手順で三編に分割されたのか、その拠り所は判然としていない。それを解き明かす重要な手がかりを与えてくれることになるのである。

一方、前者の場合であれば、疑うべくもないと考えられてきた清逸本と組みを再考する必要が出てくる。その上で、抄出本を作成した意味や、その作業への土清の関わりの有無などを考察する必要がある。

組み合わせ本には「ま」部以下が揃っているため、まずその精査を進めることで、今回のような傾向が「ら行」部以外にどの程度表れているのか、或いは「ら行」部が異端であるのか、そうだとすればその理由はなぜか、といったことを確認する必要がある。その上で、組み合わせ本の正確な立ち位置を確定していかなければならない。テキストの信頼性の問題を踏まえても、組み合わせ本が倭訓栞成立過程の解明において大きなキイを握っていることは間違いない。

## 注

- \* 1 三澤氏の講演資料「土清の学問その二——『和訓栞』について」(2007, 於津中央公民館)では、組み合わせ本について次のように指摘している(一部原文に手を加えた)が、その後この点についての論は見られないようである。

前編「あ」行～「は」行までの整版本と「ま」行～「わ」行までの写本の組合せ本。これに類する写本は冊数を異にする(都立中央図書館蔵十二冊、東京大学総合図書館蔵七冊、尾崎知光氏旧蔵本十二冊、拙蔵十三冊、他本など)が何れも同一祖本に基づく転写本である。なお本書は見出し・語義の抄出が見られ、自筆本以後いつごろ成ったものか、いまだ確定するに至っていない。

- \* 2 三澤(2008)では、都立図書館本、東大本に加えて東北大本を紹介している。

## 参考文献

- 尾崎知光『倭訓栞大綱 解説・資料』(勉誠社, 1984)  
 平井吾門「倭訓栞を中心とした近世国語辞書史研究の目指すもの」(弘前大学国語国文学, 35号, 1-26頁, 2014)  
 平井吾門「倭訓栞の語種——自筆本「ら行」部を中心として」(『日本語文化研究』, 第四輯上・下, 延辺大学出版社, 2016発行予定)  
 三澤薫生「谷川土清自筆『倭訓栞』について」(和洋国文研究, 41号, 36-47頁, 2006)  
 三澤薫生「もう一つの『和訓栞』稿本—『俚言集覧』の『和訓栞』について—」(和洋国文研究, 42号, 33-42頁, 2007)  
 三澤薫生「河北景楨筆、谷川清逸書写『和訓栞』稿本について(上)」(和洋女子大学紀要人文系編, 48号, 15-31頁, 2008)

## 付記

本研究はJ S P S 科研費26770159の助成を受けたものである。

(2016. 1. 18 受理)